「降伏のすすめ」　エレミヤ２７：１－２２　　2025,2,16　　札幌発寒教会

古賀　清敬

預言者エレミヤは迫りくるバビロニアの脅威に対して、戦うのではなく降伏しなさいと語ってきました。それは、これまでのユダの罪に対する神の裁きだから、それを受け入れることが悔い改めの態度であるからという理由でした。しかしユダの王も民もエレミヤの勧告を聞かずに、戦って敗北してしまいました。今日の２７章はそのすこし後、ゼデキヤ王の治世の初め、おそらく紀元前５９７年以降数年の間の出来事と思われます。

ゼデキヤ王は、バビロンの王ネブカドネツァルがエルサレムを占領して、そのときの王エホヤキンや高官、技術者たちなどをバビロンに引き連れて行った第一回目の捕囚の後、バビロンの傀儡王として立てられた王です。ですから、ゼデキヤは当初はネブカドネツァルに服従の態度をとっていました。

しかしながら、敗北したユダの民、また同じように攻撃されて屈服した周辺の諸民族は、なんとかバビロンへの反撃ができないかと考えていました。それで、周辺の諸民族からの使者たちがユダのゼデキヤ王を訪ねて来て、団結してバビロンへの反撃に出ようと促しに来た、というのが今日の場面です。今で言えば、大国バビロンに対抗して集団安全保障、軍事同盟を結ぼう、というわけです。

まさにその時に、主なる神からエレミヤに対して、首に軛（くびき）をはめるデモンストレーションと語るべき言葉とが示され、それが４―１１節に記されています。それは、万物の創造主にしてすべての権力の主権者である神が、ネブカドネツァルに一定の期間、権限を与えたゆえに、ユダも諸国民も従いなさい。もし逆らうなら剣、飢饉、疫病で死に、国は完全に滅亡し捕囚とされるが、従うなら命と今のままの生活とは守られる。バビロンと戦えと言っている預言者や夢占い師などにだまされてはならない、ということでした。

次にエレミヤは、同じようにゼデキヤ王にも、ネブカドネツァルに服従するようにと語りました。さらに祭司たちと民のすべてに対して、偽りの預言者たちが神殿の祭具がすぐにでも戻って来る、つまりバビロンに立ち向かうならば勝利するのだ、と言うのを真に受けてはならない、と警告しています。

第一回目の敗北で、ユダに残留したほとんどの人々が、また近隣諸国の民も、何とかバビロンの支配から解放されて屈辱を晴らしたいという思いで一杯でした。全体がそのような反バビロン感情であふれているときに、戦わないでバビロンに降伏しなさい、というのは今で言えば「非国民」「売国奴」「敵の回し者」などという罵詈雑言を浴びせられ、いつ殺されてもおかしくない状況にエレミヤはおかれていました。

ただし、わたしたちはこの場面だけを切り取ってとらえるのではなく、これまでエレミヤ

が語ってきた言葉、それに対する王や民らの反応をふり返りながら受けとめることが大事かと思います。

すなわち、エレミヤはいきなり降伏を勧めてきたのではなく、これまでは、もし王や民らが長年の罪（偶像崇拝、社会的不正義、不公正）を悔い改めるならば、神は裁きの災いを下そうとする決定を思い直してくださるかもしれない、と語ってきました。しかしながら、王も民らもその勧めを聞こうともせず、大国エジプトに頼れば何とかなるだろうと思い込んできました。また、我々には神に祝福されたダビデ王朝とエルサレム神殿があるから大丈夫だ、と安易な宗教的依存心に覆われていました。そんな中、バビロンの勢力はさらに大きくなり、具体的な脅威となってきました。

そこでエレミヤは、もはや神はユダのこれまでの罪に対して一定の裁きを与えられるから、バビロンと闘うのではなく降伏することが悔い改めることであり、神の正しい裁きを受け入れることである、と語り出したのです。それでもユダの王も民もエレミヤの言葉を聞かず、バビロンと戦って敗北を喫し、指導者らの第一回目の捕囚という悲惨な結末を経験したばかりでした。

およそどんな戦争でも、相手を初めから全滅させるのではなく、手心を加えて一定の寛大を示して、相手国の住民の恨みを少なくして、その後の支配にできるだけ従順になるようにしておくのが常套手段のようです。ネブカドネツァルがユダとエルサレムを一挙に壊滅させず、捕囚民を一定数に限り、神殿の祭具もすべてを持ち去らず、同じヨシア王の子ゼデキヤを傀儡王に立てたのも、そのような思惑からと思われます。

しかし神は、そのような征服者の常套手段を、ユダの人々が悔い改めるための、もう一度の機会として用いられたと言えるでしょう。本当に脅威なのはバビロンではなく、ユダの王も民も神を畏れず、不正義と不公正を改めないことである。今やそれに対する刑罰が下されているのだから、降伏して刑罰に服しなさい。そうすれば、せめて命は救われ捕囚の患難からは免れるだろうというのが、ここに及んでエレミヤが勧めた態度であり、外交政策でした。

ここには、神はわたしたち人間がどのように応答するかによって、決定を変えてくださる自由を保っておられる神であること、また、どのような状況の中でもなお悔い改める機会をつくってくださる神の忍耐と慈愛とが示されていると言えます。

つぎにエレミヤは祭司たちと民のすべてに向かって同じ主旨のことを、神殿の祭具との関わりで語りました。偽りの預言者らが、バビロンに対して戦い勝利するから、バビロンに持ち去られた祭儀の用具はすぐに戻って来る、と楽観的な期待を煽っていたからです。それに対してエレミヤは、祭具はすべて持ち去られる、つまり戦うならば壊滅的な被害を受け、神殿は破壊され、残っている祭具もすべて持ち去られてしまう。しかし一定期間が過ぎれば、神はその祭具をユダの地に持ち帰らせられるだろう、と語りました。

なぜ、祭具のことがそんなに大事な関心事なのでしょうか。このような祭具の命運は、た

んにユダの民の命運の象徴というにとどまりません。ユダの民は「自分たちには主の神殿があり、神の祝福があるから大丈夫だ」という誤った依存心が、罪を悔い改めるのを邪魔していました。それでエレミヤは、神はまさにその神殿を破壊されるであろう、と語っていました。それでも祭具だけは、大事な物として残されるというのは、どのような意味があるのでしょうか。わざわざ、神が保存し持ち帰らせると言われているからには、たんに高価な材料で貴重品だからということでもないと思われます。

そもそも古代イスラエル社会での祭儀というのは何でしょうか。それは世俗の社会でさまざまな罪悪が犯されるときに、必ず聖所の祭具が汚されるゆえ、その汚れは必ず浄められねばならない、という意味と機能を持っていました。聖と俗とは区別されながらも、密接なつながりを持っていました。すなわち祭儀は、俗世界で破られ汚された罪を明らかにし、さらに神との交わりと隣人同士の交わりを回復する場として、最も重要かつ欠かせないものだったのです。

ですから、それを囲む幕屋や神殿は聖と俗の区別をつけるためでした。なぜ区別をつけるかと言えば、俗世間の論理や利害・上下関係が聖なる領域に影響を及ぼさせないため。また、俗世間の不義不正を覆い隠すために聖なる儀式が悪用されないため、だと言えます。預言者の祭儀批判の理由は、祭儀を軽んじていたからではなく、むしろ大事な祭儀においてこれらが破られていたから、と言えます。

一方で、聖と俗とは密接に関わっており、俗のあり方がそこで終わるのではなく、必ず聖なるものを汚すゆえに、それをいかに清めるのかという課題を明らかにするのが祭具である、といえます。それゆえにこそ、祭具は大事な意味を担っていたのです。

当時のユダの民も祭司も、そのような祭儀本来のあり方から逸脱して、自分たちの安心材料にしか考えてはいなかったと思われます。それでもなお、神は祭儀の意味と機能を保たれておられることが、ここで明らかにされています。

すなわち、たとえエルサレム神殿も町も破壊されても、国家は滅亡し、民は捕囚となっても、それでも神は交わりの道を残してくださっている、という「恵みの徴」として祭具は用いられているのです。

これは、古代イスラエルの民だけでなく、主イエス・キリストの教会が礼拝の民として、この世での罪に満ちた現実と無関係にではなく、むしろそのただ中で、悔い改めて、罪の赦しと解放が与えられ、ただ神の御心にのみ従うことによって、自由に生きる者として建てられている、という教会の本質を表してもいます。（了）